

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 小野 純一

スーフィズム（イスラーム神秘主義）史上最大の思想家である神秘哲学者イブン・アラビー（1240年没）については、これまで多くの研究書、研究論文が刊行されてきた。研究者の多くを惹きつけたのは、イブン・アラビー、およびその思想を継承する存在一性論学派の世界観を構成する存在論や宇宙論であった。小野氏が本論文の主題として設定したのは、存在論などの形而上学的理論として論理的に整理される以前に体験され、それらの理論に裏付けと根拠を提供する神秘体験と直観である。神秘主義思想において極めて重要な位置を占めながらも、論理的、体系的とは限らない神秘体験そのものについて立ち入った先行研究は少ない。本論文は、イブン・アラビーが神秘体験をどのように反省的に自己理解しようとしたのかを描き出すことで神秘体験の本質構造に肉薄しようとした H. Corbin の研究を批判的に継承しつつ、神秘体験としての直観を記述し、イブン・アラビー自身による直観の理解や説明に見られる思考のあり方を明らかにすることを目指している。そのなかで井筒俊彦の研究にも批判的に論及している。

小野氏がまず着目したのは神秘体験と直観の現れ方であり、第1章では、イブン・アラビーの主著『マッカ啓示』『叡智の台座』においていかなるヴィジョン（形象あるいは像）がどのようにして現れたのか、それがイブン・アラビー本人にとっていかなる意義を持つものとして了解されたのか分析される。第2章では、これまでの研究ではおこなわれなかった心理学的分析を援用することで、他者の主観を自分のものとして体験することが超越性と確信につながっていることが示される。第3章は、神秘体験において直観された「無限」がどう記述されたのかを分析し、イブン・アラビー思想においては「無限」が有限な現実世界を基礎づけていることを明らかにする。続く第4章、第5章、第6章は「無限」とこの世界との関わりを問題にしておき、存在そのものが「香り」として世界に充満していくという認識や、存在者を流動的に顕現させる体験を指示する「遍在貫流」の観念、さらに「自然本性」を通じた人間による存在認識に焦点が当てられる。最後の7章は認識や思惟を規定する「文字」に注目し、文字神秘主義を神と世界を記述する方法として位置づける。

審査委員からは『マッカ啓示』『叡智の台座』を翻訳する際の誤り、論の展開の仕方や論文構成のあり方に関わる問題点などについて指摘があった。しかし、それによって、イブン・アラビーが神秘体験そのものと神秘体験から世界認識への展開をどのように描き、それらをどのように位置づけたのかを明らかにしたという小野氏の功績が毀損されるわけではない。これまであまり分析されることがなかった神秘体験を思想全体の中に位置づけ体験と形而上学的思考との関係性を明らかにした点で、本論文はイブン・アラビー研究史に貢献する労作であると評価される。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。